

## 明治期の衆議院議員総選挙と旧藩秩序

### —佐賀県における進歩党系の形成過程—

山下春菜

はじめに

廃藩置県後、藩という存在は消滅したことになったが、実際には旧藩を単位とした社会は残存し続けた。とりわけ佐賀県では旧藩秩序に則った強固な団結にもとづいて自由民権運動が展開した。旧藩という単位が政治的結合に大きな意味を持っていたのである。議会開設を迎える中で、旧藩秩序に則った政治的結合が選挙、ひいては議会政治にどのような影響を与えたのか。佐賀県の第一回～第六回衆議院議員総選挙を分析し、佐賀における旧藩秩序が県内の政治勢力に与えた影響を分析することを通じて、県内の主流派が進歩党系へ収斂していく過程を明らかにする。

#### 1章 佐賀県下の大同団結運動

##### 1-1 県内党派対立

- ・郷党会…1888年9月結成。武富派。九州改進黨肥前部の初期メンバーが中心。
- ・同成会…1889年2月頃結成。反武富派。九州改進黨肥前部参加者中心。

##### ◎郷党・同成会の特徴

佐賀開進会から九州改進黨肥前部までの運営方法と類似している<sup>1</sup>＝本藩士族中心の本部、支藩その他の地域に支部を置く。

旧藩佐賀藩領外の地域を含む東松浦郡（郷党会）・西松浦郡（同成会）へそれぞれ支部を設置＝旧佐賀藩領の支配領域に立脚する政治結合を超えてその影響力が拡大している。

##### 1-2 大同団結運動

- ・九州連合同志会…九州の大同団結。条約改正について立場を曖昧にする。
- 条約改正反対派の「九州派」・同成会は不参加。民党合同を目指す武富・郷党会は参加。後身の九州同志会が立憲自由党に合流→立憲改進黨への合同を積極的に考える両属的な党派として成立

- ・第1回衆議院議員総選挙を目前に、小城出身者の紹介で松田が郷党会に参加。

◎条約改正への立場を曖昧にしてより広範な合同を目指した九州連合同志会に参加した郷

---

<sup>1</sup> 佐賀における自由民権運動では、旧藩支配領域を単位とした士族的結合を利用して、旧佐賀本藩士族らが旧藩の支配領域ごとに「区会」を設置し、勢力拡大を図った（前掲拙稿「士族民権の再検討-佐賀における士族的結合を中心に-」）。

党会と、条約改正反対を表明した同成会に分かれて対立を深め、その後の佐賀県における衆議院議員総選挙にも大きな影響を与えた。

## 第2章 佐賀県における民党連合路線

### 2-1 第1回衆議院議員総選挙～第2回衆議院議員総選挙

- ・大隈重信・旧鹿島藩主鍋島直彬推薦による志田林三郎出馬

→郷党会内で出馬の合意が取れず断念＝旧鹿島藩主、あるいは大隈という県内の有力者の意向が輸入候補である限り通用しない。

- ・第1区・3区は旧佐賀本藩・支藩領が大部分を占めており、旧藩支配による結合が可能な地域＝郷党会が旧藩秩序に基づく政治的結合を掌握していた

- ・第2回衆議院総選挙…選挙干渉による郷党会系の落選（同成会系＝吏党側）

→それとは無関係に第2区（東松浦郡・西松浦郡）が「随分難所と被存候<sup>2)</sup>

＝譜代大名領（旧唐津藩領）・西松浦郡が「士族又は青年者之団結にも無之土地<sup>3)</sup>

◎佐賀本藩の旧支配領域に立脚した郷党・同成会は、佐賀藩領外の地域を広範に含む第二区には影響を及ぼすことができない＝政治的空白地帯

### 2-2 自由党九州遊説の衝撃

- ・九州同志会が合同していた立憲自由党が「自由党」に党名変更＝立憲改進黨との合同路線への否定

自由党九州遊説の計画…九州内は大同派の分断を、郷党会系は特に自・改両属状態の解消を恐れて謝絶するも強行される

→1893年9月24日に自由党星亨が佐賀入り

江藤新作ら郷党会系と星・同成会系の衝突→武富らの自由党脱党・九州内の分断・郷党会系の自・改両属状態の解消

- ・松田の自由党佐賀支部再興…松田の地盤である小城と自由党が結びつく。

◎実質的な二党両属状態は解消され、民党合同路線も捨てざるを得ない＝旧藩秩序に基づいた結合に立脚した民党合同路線の破壊

## 第3章 民党連合崩壊後の佐賀における大合同路線

### 3-1 第3回衆議院議員総選挙

- ・郷党会系は自由党から旧自由党の革新派として同志倶楽部へ合流、さらに同志政社へ

---

<sup>2)</sup> 「(明治二十五)年一月十四日 江藤新作書簡 大隈重信宛」『大隈重信関係文書』二 (みすず書房、二〇〇五年)。

<sup>3)</sup> 「(明治二十五)年二月十四日 門馬尚経書簡 大隈重信宛」『大隈重信関係文書』一〇 (みすず書房、二〇一四年)。

- 自由党を脱党した郷党会系あるいは九州の大同団結派による政党団結の道の模索
- ・九州における自由党勢力は、「自由党の勢力微々として振はず九州に自由党なしとまで称せらるゝに至りし<sup>4)</sup>」というほどまで低迷。しかし、九州内に自由党「支部」を設置する計画があると報じられている<sup>5)</sup>。
- =郷党会系=同志倶楽部、同成会系=自由党という構図の成立
- ・秀島家良の出馬による郷党会系分裂の危機
- 市=本藩出身かつ郷党会系主流派である武富・江藤らが、大隈を通して東京から連れて来た秀島という候補を、郡=郷党会系の大多数を占める「土着の人」の意見をよく聞かずに候補に立てたことに反発する人々が予選会で野田を候補に選ぶ。  
武富らは予選の結果に従いつつ、党派をなだめることに奔走した。
- ◎第一区・三区は得票数でも圧倒しており、旧藩秩序にもとづく郷党会系の党勢が保たれている。第二区は接戦であり、第一回から旧藩領外の勢力均衡が続いている。旧藩の影響力の有無が選挙の当落に大きく影響していた。

### 3-2 第4回衆議院議員総選挙

- ・再度秀島家良の出馬希望…武富・江藤は第2区の候補であれば推薦可とする。
- 第2区=地盤がかなり不安定。逆説的にいえば外から参入しても当選が狙える選挙区  
秀島は第1区からの出馬にこだわりを見せ、不成立
- ・旧鹿島藩領である藤津郡鹿島内における民党倶楽部（永田佐次郎・永野静雄）と同胞会（原忠順・田中馨治）の対立→旧鹿島藩主鍋島直彬・大隈の介入による表面的な和解  
松田正久と同胞会の接近…自由党佐賀支部が鹿島内の対立を利用して、同胞会を引き入れることで、第三区の中で勢力を増そうとしている=自由党という国政政党によって、第三区の旧藩の結合が動揺し、分裂する恐れ
- ◎第三区の旧藩の結合は分裂することなく、前回の当選者である二位が圧勝した。星の九州遊説以後、郷党会系から松田へ主導権が移った自由党佐賀県支部の政治路線は、旧藩秩序を破壊するほどの力を持ち得なかったことが示唆されている。

### 3-3 第5回・第6回衆議院議員総選挙

- ・一八九六（明治二九）年三月一日、立憲改進黨・立憲革新党・大手倶楽部などが合同して進歩党が結成=改進黨の比重を大きくするため提携相手を選んだ小合同路線
- ⇔国民協会を含めて合同すれば九州勢力を介して松方正義ら薩派の影響力が増す大合同路線はとらなかった。
- ・江藤の進歩党大合同路線…国民協会との合同、薩派への接近、伊藤博文に反発した国民協

---

4 一八九四年二月二日『東京朝日新聞』「九州に於ける自由党」。

5 前掲一八九四年二月二日『東京朝日新聞』「九州に於ける自由党」。

#### 会脱走者の取り込み

＝小合同路線によって切り離された大隈と薩派の関係の再接続の試み。実現せず。

・江藤の「県下に一の政党<sup>6</sup>」構想…九州改進黨肥前部以後、郷党・同成会系に分裂してしまつた佐賀県内の政治勢力を再統合する目論見

・第5回衆議院総選挙…第四回の当選者と同一人物が当選＝郷党会系の政治地盤が強固であり、議席確保が安定（松田は全区全敗）

・1898年6月、自由党・進歩党の合同による憲政党の結成

→郷党会系と対立していた旧自由党の松田が政党上では同陣営＝同成会系、松田の政治支持基盤である小城も憲政党の支持基盤＝江藤の構想に近づく。

・第6回衆議院総選挙…郷党会系の中で第二区候補について意見が分かれたものの、松田を候補とする。

◎第六回衆議院議員総選挙の結果は、ほぼ全ての票が予選会候補に集中し当選

＝佐賀県内で対立していた郷党・同成会系、松田ら旧自由党が憲政党結成によって統合され、無競争状態へ

#### おわりに

以上のように、佐賀における郷党会系を中心とした進歩党系の支持基盤は、旧藩秩序に立脚して成立した。郷党会系で対外硬派であった江藤は、進歩党系の非主流派として行動していき、主流派である犬養毅の政治路線とは異なる動きを見せていくと考えられる。そうした動きを支えた背景には、久野洋氏が指摘したような民力休養といった政策を重視する政治路線<sup>7</sup>とは別の、旧藩秩序に基づく行動原理が働いているのではないかという点については、改めて今後の課題としたい。

---

<sup>6</sup> 「(明治三十)年六月六日 江藤新作書翰 大隈重信宛」『大隈重信関係文書』二。

<sup>7</sup> 久野洋『近代日本政治と犬養毅——一八九〇～一九一五——』第二部補論（吉川弘文館、二〇二二年）。